

発表⑨



「読解力とは何か—国語教育と日本語教育における読解ストラテジーの比較から—」

渡辺 真由子

モンゴル国立大学 法学部 日本法教育研究センター

本発表では、読解力とは何かという問いを、日本の国語教育と日本語教育で使われている読解ストラテジーを整理し比較することを通して考察した。

まず、国語教育においては、2008 年に国語科学習指導要領が改訂され、生徒が自ら学び、課題を解決していく能力の育成が重視されるようになった。

指導要領の改訂は、国語を学ぶ目的にも色濃く反映されており、中学国語科学習指導要領には、「考え方を広げる」「読書を通じて自己を向上させる」といった読むことの目的が学年ごとに設定され、これに対する指導内容も明確に示されている。学習指導要領の解説書には具体的な方略も記されており、これに生徒用読解問題集の記述を照らし合わせたところ、①場面や登場人物の心情をとらえる、②段落をとらえる、③論理の展開をとらえるという3点が、中学校国語科において必要とされる読解ストラテジーだということがわかった。

そして、日本語教育でも読解ストラテジーを明示的に使用する指導の重要性が主張されはじめている。そこで日本語教育機関で使用されている主な読解教材を比較した結果、日本語教育においては、「全体像を把握する」「段落ごとに読む」「既有知識を活用する」の3点が、読解ストラテジーの大きな柱となっていることがわかった。

国語教育と日本語教育における読解ストラテジーの違いを見てみると、まず、文章が母語で書かれているか第二言語で書かれているかという根本的な違いがあるが、読むことの目的も大きく異なる。前述したように、国語教育では読書によって考え方を広げたり、自己を向上させるといった目的が設定されているが、日本語教育では、「日本語能力試験に合格する」「専門書を読むことができるようになる」のように「読む」ことそのものが目的になっている傾向が強い。

「読解力」を、単に文章を理解することだけでなく、理解した文章をどのように自分の中に吸収するかであるとするれば、日本語教育においても、読むことの目的について、再考し、ものの見方や考え方が広げられるような読解教材が必要となってくるであろう。